

## 令和 8 年度 入学式式辞

本日、山梨大学に入学された学部生 877 名、教職大学院 38 名、修士課程 269 名、博士課程 44 名の皆さん、ご入学、誠におめでとうございます。

山梨大学の教員・職員・学生を代表し、皆さんの入学を心より歓迎いたします。皆さんがこれまで積み重ねてこられた努力に、深い敬意を表しますとともに、皆さんを支え、励まし続けてこられたご家族、関係者の皆様にも、心からお祝いを申し上げます。また本日はご多忙のところ、山梨県知事 長崎幸太郎様をはじめ、多くのご来賓の皆様にご臨席を賜りました。厚く御礼を申し上げます。

皆さんがこれから学ぶ山梨大学は、2002 年、旧山梨大学と山梨医科大学が、国立大学として全国で初めて統合し、誕生いたしました。教育学部の源流は、寛政 7 年、1795 年に設立された「徼典館」にまで遡ります。工学部は大正期に設置された山梨高等工業学校を母体とし、2 年前に創立 100 周年を迎えました。医学部は、1978 年に現在の中央市に開設された山梨医科大学を母体とし、48 年の歴史を有します。生命環境学部は 2012 年、農学系学部として創設されました。大学院は、大学統合を機に分野を横断した体制を整備し、現在は医工農学総合教育部修士課程・博士課程として教育・研究活動をおこなっています。専門職大学院である教職大学院は 2010 年に設置されました。現在、本学には約 4,800 名の学生と、3,300 名余りの教員・職員が集い、学びを共にしています。

さて、今日から皆さんは、山梨大学の学生として、新たな一步を踏み出します。これから始まる大学生活を、どのように過ごしたいと考えているのでしょうか。私は皆さんに、ぜひ心に留めておいていただきたいことがあります。それは、本学山梨大学には「無限の可能性」が広がっているということです。

その可能性とは、第一に、山梨大学そのものがもつ可能性であります。山梨大学は、「地域の中核、世界の人材」のキャッチフレーズのもと、人材育成と研究成果の社会還元、地域への貢献を積極的に進め、現代社会が抱える課題の解決に努めています。そして、分野を越えた連携、多様な文化や価値観との協働を通じて、新たな価値を生み出す大学を目指しています。この本学がもつ可能性を、皆さん自身が主体となって広げていってほしいと願っています。

第二に、皆さん一人ひとりがもつ可能性です。大学とは、正解や解決方法がない課題に向き合い、自ら考え、迷い、挑戦する場所であります。成功も失敗も、すべてが皆さんの糧になります。知識や技術の習得のみではなく、人と関わる力、考え続ける力を育み、自分自身の限界を更新していってほしいと思います。

第三に、社会へとつながる可能性です。皆さんの学びは、やがて地域へ、そして世界へと広がっていきます。大学での経験が、誰かの役に立ち、社会を少しでも前に進める力となる。そんな実感を持てる学生生活にしてほしいと願っています。

山梨大学は、入学された皆さんの「無限の可能性」を大きく育むため、そして、人口減少問題やグローバル化といった、急速に変化する社会を見据え、学びの在り方や、地域との連携強化に向けた見直しを行っています。

1つ目の見直しとしては、全学共通教育の改革です。「論理的思考力」、「協働による問題解決力」、「情報活用力」、「グローバル社会への対応力」など、皆さんが21世紀を生き抜くための基盤的な力を体系的に育成しています。例えば、昨年の4月に新設した1年次での創発PBL科目群では、学部や学科を越えた学生のグループをつくり、実社会の課題解決に向き合っていきます。こうした学びを通じて、自ら課題を設定し、他者と協働しながら行動できる人間へと成長してほしいと考えています。

2つ目は、「学生広報スタッフ」という制度です。「学生広報スタッフ」は、学生の視点から本学の魅力を情報発信し、広報誌やテレビCM、動画制作などを行っています。社会と大学をつなぐ実践的な経験を通して、多様な視点を持ち、周囲と高め合い、相乗的な成果を生み出せる人材へと成長されています。

3つ目の見直しとして、山梨大学は今年度令和8年度から3年間を目途に、「地域と、未来を創る大学へ。」をキャッチフレーズとして掲げ、山梨県唯一の国立大学として地域の課題解決に主体的に関わることを目指しています。

2年後の令和10年4月には、学部相当の文理融合型の教育組織としてデータサイエンス、AIリテラシーを学び、PBLを主体とした地域課題解決型の学修を基盤とする「社会デザインサイエンス学環（仮称）」を創設する予定であります。

またこれに先立って令和9年度には、大学としては我が国で初めて、産業界・自治体・金融界・マスコミから出向されるコーディネーターが、地域課題の解決に向けて協働して取り組む常設の組織を、本学の敷地内に「やまなし地域活性化推進機構（仮称）」として設置し、産官学金言連携による地域活性化を牽引する役割を担うこととなります。こうした取り組みに、皆さんにも積極的に関わっていただき、ともに山梨という地域に、日本全国に、さらに全世界に活力をもたらすような生き方をしたいと存じます。

最後に皆さんに、常に胸に刻んでおいていただきたい、そして大切にしてほしい言葉をお贈りいたします。

本学の卒業生であり、ノーベル生理学・医学賞を受賞された大村智先生から教えていただいた「恕（じょ）」という言葉です。女へんに口、下に心と書きます。

「恕」とは、常に相手の身になって、物事を考えるやさしさと、思いやりを意味する言葉であります。そして、「恕の心」とは、相手を受け入れる心、相手を許す心、相手をおもんばかる心そして、そして相手をいつくしむ心のことです。

私は、山梨大学の学生の皆さん、そして職員、教員の皆さん全員が、「恕（じょ）」の心を常に大切にしてほしいと願っています。大学は、学生・教員・職員が、互いを尊重し、支え合うことで成り立っています。学生の皆さんがより居心地よく学ぶことができ、教員がより教育研究に専念することができ、職員がより意欲的に職務に当たることができる大学を目指すためには、「教職学協働」が、その根底になければなりません。「教職学協働」とは、教員・職員・学生が互いに共感をもち、歩調を合わせ、同じ方向へ進んでいくことを目指す理念であります。それぞれが大学の一員として相手を理解し、思いやる姿勢があつてこそ、真の協働が生まれ、大学全体の力が最大限に発揮されます。

私は、教員・職員・学生みんなが山梨大学を愛し、そして教員・職員・学生みんなでより素晴らしい山梨大学を創っていくために、新入生の皆さんも率先して、真の「教職学協働」を推進していただきたいと存じます。

本学は、この「教職学協働」の理念のもと、学生、職員、教員がより近い距離で、ともに考え、ともに悩み、そしてともに解決していく大学を目指しております。

新入生の皆さん、どうか遠慮せず、専門分野を超えて様々な学生、多くの教員・職員と積極的にコミュニケーションを図ってください。

保護者の皆様に申し上げます。

お子様がこれから過ごす山梨大学は、単に知識を得て、技術を習得する大学ではありません。学びを通して、人として成長することを大切にし、そのための環境が整った大学であります。教員、職員一同、皆様方と同じ思いで、お子様の挑戦と成長を見守り、そして全力で支えてまいります。

本日は、9 か国から 30 名の外国人学生の皆さんが、学士課程、修士課程、そして博士課程に入学されました。留学生の皆さんが、大きな決意と勇気をもって本学山梨大学に来られたことに、心より敬意を表し、英語でのスピーチをさせていただきます。

It is my great pleasure to welcome all our international students to the University of Yamanashi, and to offer you my heartfelt congratulations on your admission.

Choosing to pursue your studies in a new country is both an exciting and demanding journey, and we sincerely commend your courage and determination.

We are confident that the knowledge and experiences you gain here will not only enrich your academic life but also broaden your horizons and create new opportunities for your future.

Please embrace each challenge as an opportunity to grow and remember that we are here to support you every step of the way.

Once again, welcome to our university, and congratulations to each and every one of you today.

結びに、入学された皆さんのご健勝とご活躍、並びにご家族の皆様のご多幸を心底よりお祈り申し上げ、またご入学を心からお祝いし。私の式辞といたします。

ご入学、誠におめでとうございます。

令和8年4月7日

国立大学法人山梨大学 学長 中村 和彦